

生誕100年 塩出英雄

ベフルス
ふくやま美術館

2012年9月12日(水)－12月9日(日) 会場:常設展示室
前期10月28日(日)まで 後期10月30日(火)から

※月曜休館／ただし9月17日(月)、10月8日(月)は開館、9月18日(火)、10月9日(火)は休館



8.塩出英雄《茶庭》1936年

塩出英雄は、帝国美術学校（現・武蔵野美術大学）日本画科に学び、日本美術院展覧会（院展）で活躍した、福山市出身の日本画家です。このたびの所蔵品展は、塩出英雄（1912～2001）の生誕100年を記念して開催するものです。ここには、本展開催に際して今年2月にご遺族よりご寄附をいただいた未公開の青年期の作品24点も前後期に分けてあわせて展示いたします。

この《茶庭》（No.8）は、東京・吉祥寺にあった宗徧流の茶人、山岸宗住（1822～1954）の会水庵の茶庭をモチーフに描いた美術学校の卒業制作で、ここから画家としての本格的なスタートが切られました。

英雄は、美術学校在学中に岡倉天心（1863～1913）の英文書『茶の本』を読み、幼少期より親しんでいた茶道の世界に改めて目覚めました。また、美術学校の恩師で東洋美学の教えを受けていた金原省吾（1888～1958）の『君台観左右帳記』（室町時代に成立した座敷飾りに関する秘伝書）研究を手伝うためにも、茶道の手前の知識が必要でした。英雄は、学生時代より井の頭にあった臨済宗の道場に通い、仏教学者の高楠順次郎（1866～1945）を知り、その縁もあり宗徧流の茶道を学んでいました。

作品には、その茶道の精神が表されているとともに、英雄が熱心に指導を受けた山口蓬春（1893～1971）らによる新興大和絵の影響がみられ、女性の着物の美しい彩色や飛石の西洋画的な陰影のつけかたなどには、練成された画家の落ち着きや品格が感じられます。



1.《植物図》



4.《蓮(習作)》



2.《龍の浦》



3.《山間》



5.《植物図(習作)》☆



9.《少女》



28.《欲報岡極》



25.《赤牡丹(習作)》★

I 画家への道程

塩出英雄は祖父の代から続く菓子舗に生まれ、茶道や古美術を嗜んだ祖父母の元で育てられました。幼い頃、京都から来た和菓子職人の手つきを真似て、生菓子の端をしんこ細工のようにこねて遊んでいたといいます。こうした体験が「和菓子の色彩」と評される独自の色彩感覚を育んだのです。また、幼少期から弘法大師の信仰があつかった祖父に連れられて、明王院をよく訪れたといいます。五重塔の中にある壁画や本尊の十一面観音像などを間近に見るなかで、密教美術の美意識が自然と培われていました。祖母からは、百人一首を読んでもらうなど詩歌にも親しむようになります。

旧制中学時代の英雄は、明王院に通い龍池密雄僧正(1843~1934)から真言宗の教えを受けるようになります。龍池は、のちに高野山金剛峯寺の座主になった高僧で、当時は京都大覚寺の門跡を兼務していました。このような少年時代の密教体験が、その後の道程の原点となりました。

1929年(昭和4)、17歳の時に描いた《植物図》(No.1)には、「萃華」の落款印章がみられます。英雄の画号で確認できる最も早い時期のもので、英雄自筆の年表によれば、美術の道を志したのは、この中学3年生の終わり頃だったとあります。

1930年(昭和5)11月、英雄は、中学生の代表として《龍の浦》(No.2)を福山市役所に出陳し、行幸中の昭和天皇の天覧に浴しています。この作品は、画中に「桃林山より要害を望む」と賛を書き、医王寺の参内から臨む龍の港の景観を透明感のある彩色で丁寧に描いています。《山間》(No.3)もこの頃の作品で、霧の立ち込める山間を近景、中景、遠景と色調を微妙に変えながら描いた、奥行きのある情景です。またこの年、祖父は姻戚関係にあった尾道出身の日本画家・片山牧羊(1900~1937)を英雄に会わせ、絵の手ほどきを受けさせています。牧羊は、1927年(昭和2)に帝展で初入選で特選となるなど、新進気鋭の画家でした。牧羊は、開校間もない帝国美術学校への進学を英雄に勧めたといわれます。英雄は、牧羊に上京後から入学までの約一月間、技術的な指導をはじめ、絵に対する心構えまで細やかに教わりました。

1931年(昭和6)4月、帝国美術学校日本画科に入学した英雄は、金原省吾に東洋学・美術史を学び、実技に関しては、山口蓬春に最も熱心に指導を受けました。裏書に「夏季試作」と記した《蓮(習作)》(No.4)や、「1学期試作」と書かれた《植物図(習作)》(No.5)は、この頃の作品です。とくに《植物図(習作)》は、龍池密雄から上京前に授かった「梅峯」を画号に用いた珍しい作品で、写生に基づく細かい観察力と繊細な表現がみられます。後年の《赤牡丹(習作)》(No.25)にみられる大和絵的な平明な表現と比較すると、写生に力を入れていたことがわかります。

美術学校在学中の1935年(昭和10)、英雄は、生涯の師となる奥村土牛(1889~1990)と出会います。また、この頃、仏教学者の高楠順次郎を知り、仏教に対する見識を深めることになります。

1936年(昭和11)、美術学校を卒業した英雄は、同校の助手となりますが、翌年には、日中戦争がはじまります。

1940年(昭和15)に描かれた《少女》(No.9)は、第5回院友展に出品した作品です。英雄は、親しかった少女をモデルに描いた当時から回想して「花模様の装ひしたる少女が椅子に坐れり初春の日」という歌を詠んでいます。

1941年(昭和16)、29歳の時、英雄は結婚するとともに、福山の胎蔵寺で得度しています。

この頃、弟の勝弘の軍服姿を描いた《欲報罔極》(No.28)があります。画中には、「敵国降伏」を不動明王に祈る種子字(仏尊を象徴する梵字)や、弘法大師の『性霊集』からとられた「欲報罔極」(恩に報いんとする心は極めて深い)という賛を書き入れ、愛する弟の出征の無事を祈念しています。

この作品は、近年まで人目に触れることなく勝弘のもとで大切に保管されていたものです。兄、英雄の優しい思いが伝わってきます。

また戦後、母親の喜寿を祝って作られた《深大寺焼茶碗 銘 西王母》(No.37)も趣深いものです。艶やかな桃花の絵柄を配した茶碗と「みちとせに ひとたびひらく もものはなの めでたきいろか かきていははむ」と自筆の歌の添え文からも、長寿を祝う気持ちが伝わってきます。

Ⅱ 院展での活躍

1947年(昭和22)、英雄は、第32回院展に《上堂》(No.29)を出品します。明王院の渡り廊下を渡り、護摩堂へ向かう僧の姿を配した風景画には、これまでの画題から大きく変化した様子が見られます。

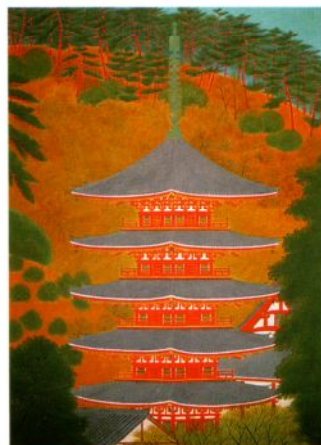
1950年(昭和25)、第35回院展に出品した《泉庭》(No.30)は、美術院賞・大観賞を受賞して注目を浴びます。この園亭は、東京白金台にある実業家、久原房之助(1869～1965)の邸宅の庭園(現在の八芳園)を描いたものです。後に「茶道画」とも評された一連の作品は、茶室や庭園にたたずむ女性を点景に、典雅で清浄感を漂わせた作品を展開します。1961年(昭和36)、第46回院展に《渡殿》を出品し、2度目の日本美術院賞・大観賞を受賞し、同人に推挙されます。1973(昭和48)には、英雄の長女をモデルに、尾道浄土寺の露滴庵の待合に座らせた姿を描いた作品《露地》(No.39)を第58回院展に出品しています。

1950年(昭和25)から約20年間は、《宝刹》(No.33)や《密院の庭》(No.34)といった寺社仏閣から人の気配を除いた石庭や庵など、凝縮された自然美を主題とした作品を描いています。風景画では、《瀬戸の浮島》(No.31)や《山寺》(No.32)のなどのように、緩やかな三角形の山容を画面の中央に据えた、構築性を強く意識した作品も描いています。

英雄は、1963年(昭和38)に武蔵野美術大学の教授となり、第48回院展と第51回院展を福山天満屋で開催することに尽力しています。とくに、広島県下で最初の院展となった1964年(昭和39)の第48回院展では、奥村土牛をはじめ、酒井三良、中村貞以といった院展作家が福山の地を訪れ、徳永豊市長(当時)ら地元関係者と「院展福山会場を語る」座談会に出席するなど、郷里での院展開催の活躍ぶりがみられます。



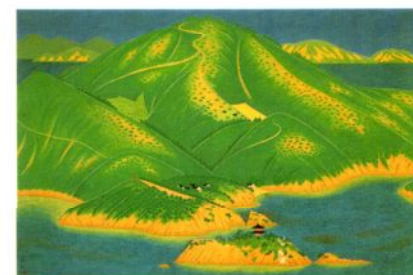
30.《泉庭》



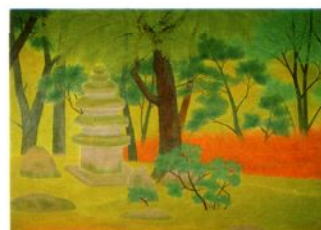
33.《宝刹》



29.《上堂》



31.《瀬戸の浮島》



34.《密院の庭》



32.《山寺》



39.《露地》



37.《深大寺焼茶碗 銘 西王母》



48.《横浜 三溪園(苑橋)》



43.《龍崗山》★



45.《湖島》☆



44.《山市》



47.《春海》

Ⅲ 崇高な景観表現

1970年末から80年代前半にかけて、英雄は、日本美術家連盟訪中団に参加し、たびたび中国の景勝地を訪問し、風景画を数多く描くようになります。

《龍崗山》(No.43)は、英雄70歳の時の第67回院展出品作です。中国の西南部、四川省重慶市にある北山は、かつて龍崗山と呼ばれました。朝焼けに照らし出されて燦然と輝く山容を描いています。「大足の竜崗山に登り来て十三層の塔を見にけり」と密教芸術の宝庫として知られる北山を回想して詠んでいます。第68回院展出品作《湖島》(No.45)は、中国浙江省の西湖に浮かぶ孤山という小島を描いたものです。梅雨の頃の深緑美しい景観を描いています。1982年(昭和57)、第37回春の院展に出品した《山市》(No.44)は、瀟湘八景という山水画の画題の名所としても知られる湖南省長沙市の古城から眺めた景観を描いています。この頃の連作は、中国の歴史的な建物や名園、広大な自然を典雅で装飾感のある平明な世界観で描いています。

1986年(昭和61)に横浜の三溪園の記念館建設委員となった英雄は、庭園と古建築に美を見出し、たびたび同園を訪れます。《園閣》(第71回院展)や《浄廬》(第73回院展)などは、その頃の院展出品作です。《横浜 三溪園(苑橋)》(No.48)も第74回院展に出品した《苑橋》のためのスケッチです。重文・臨春閣、難華の間の廊下より、池越に眺めて描いたものです。1997年(平成9)の第82回院展に出品した《春海》(No.47)は、岡山県倉敷市の鷺羽山から瀬戸内海の眺望を描いたものです。

1989年(昭和64)、喜寿を迎えた時、「私は画家であるので天地自然に接して写生をする。同時に眼に見、心に感じたことを歌に詠んで写生することになっている。一度歌に詠むとその時の感情が年を経ても何時までも忘れないものである」と述べています。このことは、仏教や禅、茶道、歌、謡曲などに少年期から青年期にかけて接し、画家としての内面を高めようとした英雄が、歌を詠むことで思い描く対象の線や形、色彩を心のなかで、崇高なものに昇華したのだといえます。

英雄が生涯にわたって絵を描く指針とし、座右の銘としたのが、金原が英雄の美術学校卒業時に贈った憚南田(1633～1690)の画論「甌香館画跋」のなかの「意は遠を貴ぶ 静かならざれば遠からざるなり 境は深きを貴ぶ 曲ならざれば深からざるなり」という南田の言葉でした。その東洋画の極致真髓を60年余にわたって一貫して探求したのが塩出英雄なのでした。

(学芸員 主査 大前勝信)

塩出英雄 略歴

1912年(明治45)4月6日、広島県深安郡福山町字鍛冶屋町3番屋敷(現在の福山市城見町1丁目35番地)に、父塩出松之助、母リョウの三男として生まれた。生家は、祖父の常助の代から続く和菓子舗であった。

英雄は、祖父母の感化により幼少の頃から自然と仏教や美術に向かう心を養った。とくに京都大覚寺門跡で明王院住職であった高僧の龍池密雄に深く帰依した。1936年、帝国美術学校(現・武蔵野美術大学)日本画科を卒業。在学中から奥村土牛に師事し、1937年の第24回院展に《静坐》が初入選。1950年には、《泉庭》を無鑑査出品し、日本美術院賞・大観賞を受賞する。1961年、院展同人となる。1963年、武蔵野美術大学日本画科教授。1969年、院展で《春山》が内閣総理大臣賞を受賞。翌年に日本美術院評議員となる。以後も院展などに意欲溢れる充実した作品を次々と発表し、1980年日本美術院理事となる。1984年、武蔵野美術大学名誉教授、勲四等旭日小綬章を受章する。1992年、日本文化振興会より、国際芸術文化賞を授与される。1999年には、練馬区立美術館とふくやま美術館で「塩出英雄展」を開催。2001年3月20日逝去、享年88歳。

【編集後記】

塩出英雄先生の日本画は、簡略的に様式化された大和絵ゆえに一見緻密に描いていないように見えます。しかし近づいてよく見ると、その濃密な筆触に驚かされます。色彩も単調に見えますが、同じ色を何度も塗り重ねて木の葉の重なりを表現したり、幾種類かの同系色を同じ順番に塗って木々の集合を表したり、様式美へのこだわりが随所に見られます。その様式化された作品が装飾性に傾かなかったのは、その背後に仏教的な素養や日本文化への確かな目をもっていたからとされます。今回の特集展示では、その青年時代の作品が初公開されます。また、特別展「横浜三溪園の名宝」でも塩出作品が公開されます。合わせてご覧頂ければ興味深いと思います。

(学芸課長 谷藤史彦)

第1室：塩出英雄

☆前期展示 ★後期展示 *寄託作品

No. 作品名 制作年 材質技法 縦×横(cm) 所蔵

I 画家への道程

1	植物図	1929	紙本着色	95.1× 67.5	当館蔵
2	鞆の浦	1930	紙本着色	22.5× 29.0	個人蔵
3	山間	1930頃	紙本着色	53.0× 66.5	当館蔵
4	蓮(習作)	1931	紙本着色	136.7× 66.5	当館蔵
5	植物図(習作)	1931	紙本着色	119.2× 66.5	当館蔵 ☆
6	松林図(習作)	1934	紙本着色	81.5× 65.5	当館蔵 ★
7	茶庭(下図)	1936	紙本着色	222.0×150.0	当館蔵
8	茶庭	1936	紙本着色	218.0×145.0	当館蔵
9	少女	1940	絹本着色	105.8× 70.2	当館蔵
10	鳥図	1940頃	紙本着色	81.0×100.0	当館蔵 ☆
11	杉図(習作)	1940頃	紙本着色	76.5×106.5	当館蔵 ★
12	桜に蝶	1940頃	紙本着色	118.0× 76.3	当館蔵 ☆
13	野原	1940頃	紙本着色	98.7× 59.5	当館蔵 ★
14	蝶舞春園	1940頃	紙本着色	66.0× 85.0	当館蔵 ☆
15	松花	1940頃	紙本着色	78.0× 96.2	当館蔵 ★
16	緑陰(習作)	1940頃	紙本着色	115.7× 80.0	当館蔵 ☆
17	緑樹(習作)	1940頃	紙本着色	90.0× 95.0	当館蔵 ★
18	童女(習作)	1940頃	紙本着色	120.0× 90.0	当館蔵 ☆
19	枝葉(習作)	1940頃	紙本着色	117.5× 76.0	当館蔵 ★
20	八手に雀(習作)	1940頃	紙本着色	177.5× 90.5	当館蔵 ☆
21	薄(習作)	1940頃	紙本着色	170.6× 90.0	当館蔵 ★
22	トモロコシと鱈(習作)	1940頃	紙本着色	104.0× 86.5	当館蔵 ☆
23	山麓風景(下図)	1940頃	紙本着色	85.0×116.5	当館蔵 ★
24	圓通堂(下図)	1940頃	紙本着色	72.5× 91.5	当館蔵 ☆
25	赤牡丹(習作)	1940頃	紙本着色	84.0× 96.0	当館蔵 ★
26	紫牡丹(習作)	1940頃	紙本着色	84.0× 96.0	当館蔵 ☆
27	芍薬(習作)	1940頃	紙本着色	84.0× 68.0	当館蔵 ★
28	欲報罔極	1942頃	紙本着色	107.5× 74.0	個人蔵

No. 作品名 制作年 材質技法 縦×横(cm) 所蔵

II 院展での活躍

29	上堂	1947	紙本着色	147.5×218.0	当館蔵
30	泉庭	1950	紙本着色	149.4×444.8	当館蔵
31	瀬戸の浮島	1952	紙本着色	133.1×197.5	当館蔵
32	山寺	1963	紙本着色	179.2×221.8	当館蔵
33	宝刹	1965	紙本着色	243.5×178.0	当館蔵
34	密院の庭	1968	紙本着色	178.2×223.0	当館蔵
35	深大寺焼茶碗 銘さみどり	1958	陶	8.9× 10.1	個人蔵
36	深大寺焼茶碗 銘むさしの	1958	陶	7.0× 11.5	個人蔵
37	深大寺焼茶碗 西王母	1958	陶	7.5× 11.5	個人蔵
38	深大寺焼 茶菓子皿	1958	陶	12.0× 12.0	個人蔵

III 崇高な景観表現

39	露地	1973	紙本着色	173.7×242.1	当館蔵
40	春雪	1975	紙本着色	53.6× 73.9	当館蔵
41	伊闕	1978	紙本着色	62.3× 82.0	当館蔵
42	園亭	1980	紙本着色	174.0×242.4	当館蔵 ☆
43	龍崗山	1982	紙本着色	181.6×242.4	当館蔵 ★
44	山市	1982	紙本着色	67.2× 92.9	当館蔵
45	湖島	1983	紙本着色	182.0×242.0	当館蔵 ☆
46	峡谷	1985	紙本着色	174.2×242.5	当館蔵 ★
47	春海	1997	紙本着色	90.9×116.7	当館蔵
48	横浜 三溪園(苑橋)	1981	色鉛筆,紙	35.0× 49.5	当館蔵

特別展示

No. 作家名(生没年)/作品名 制作年 材質技法 縦×横(cm)

49	龍池密雄(1841-1934) 般若心經	1921	絹本着色	129.0×33.4
50	平山郁夫(1930-2009) 牛のリュトン		水彩,紙	46.0×61.0 *

第2室：日本の近現代美術

☆前期展示 ★後期展示 *寄託作品

No.	作家名(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行(cm)
51	岸田劉生 (1891-1929)	橋	1909	油彩,カンヴァス	33.6× 45.7
52	岸田劉生	静物(赤き林檎二個とピンと茶碗と湯呑)	1917	油彩,カンヴァス	33.7× 45.8
53	岸田劉生	新富座幕合之写生	1923	油彩,カンヴァス	31.9× 41.0
54	岸田劉生	麗子十六歳之像	1929	油彩,カンヴァス	47.2× 24.8
55	南薫造 (1883-1950)	夏	1919	油彩,カンヴァス	116.7× 91.0
56	吉田卓 (1897-1929)	卓上静物	1925	油彩,カンヴァス	91.0× 73.0
57	須田国太郎 (1891-1961)	冬の漁村	1937	油彩,カンヴァス	48.5× 59.7
58	小林和作 (1888-1974)	秋山		油彩,カンヴァス	80.5×100.0

No.	作家名(生没年)	作品名	制作年	材質技法	☆前期展示 ★後期展示 *寄託作品	
					縦×横×奥行 (cm)	
59	安井曾太郎	(1888-1955)	手袋	1943-4	油彩,カンヴァス	89.3× 72.8 *
60	林武	(1896-1975)	妻の像	1927	油彩,カンヴァス	90.9× 72.7
61	野口彌太郎	(1899-1976)	タンジールにて	1975	油彩,カンヴァス	130.3× 97.3
62	高橋秀	(1930-)	ブルーボール#101	1971	油彩,カンヴァス	142.0×190.0
63	龔嘔	(1931-)	Violin on the chair	1967	油彩,木	75.0× 45.0×50.0
64	澄川喜一	(1931-)	翔 I	2005	神代樺,ステンレス・スチール	146.0× 38.0×38.0
65	野田正明	(1949-)	可能性	2005	ブロンズ	50.0× 49.0×40.0
66	藤井治子	(1924-)	御手洗祭り	1979	紙本着色	215.0×175.0 ☆
67	藤井治子		夕映	1987	紙本着色	215.0×175.0 ★
68	藤井治子		華と少女	1984	紙本着色	145.0× 70.0
69	北大路魯山人	(1883-1959)	金銀彩武蔵野鉢	1925-1934	陶	15.2× 27.5×27.5
70	金重陶陽	(1896-1967)	一重切花入	1964	陶	20.0× 13.0×11.0
71	中野恵祥	(1899-1974)	螭螂鈕筥	1957	真鍮,板金造り,鍍金	33.0× 25.7× 6.2
72	中野恵祥		牛頭花挿	1958	真鍮,板金造り,鍍金	31.5× 33.5×11.3

第3室：ヨーロッパ美術

No.	作家名(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
73	ジュゼッペ・パリッツィ (1812-1888)	羊飼いと羊の群れの風景	1870頃	油彩,カンヴァス	49.0× 72.0
74	ジョヴァンニ・セガンティーニ (1858-1899)	婦人像	1883-84	油彩,カンヴァス	120.0× 87.0
75	ウジェーヌ・カリエール (1849-1906)	腕組みの座る女		油彩,カンヴァス	46.0× 38.0
76	ウンベルト・ボッチョーニ (1882-1916)	カフェの男の習作	1914	油彩,カンヴァス	58.0× 46.0
77	ジャコモ・バッタ (1871-1958)	輪を持つ女の子	1915	油彩,カンヴァス	51.0× 60.5
78	モーリス・ユトリロ (1883-1955)	酪農場	1916	油彩,板	51.0× 65.0
79	ハンス・リヒター (1888-1976)	ベルナスコーニ氏像	1917	油彩,カンヴァス	60.0× 47.0
80	クルト・シュヴィッターズ (1887-1948)	抽象19(ヴェールを脱ぐ)	1918	油彩,厚紙	69.5× 49.8
81	シローニ,マリオ (1885-1961)	無題	1922	黒鉛,紙	18.0× 18.0
82	アンドレ・ドラン (1880-1954)	婦人像	1925	油彩,カンヴァス	61.0× 73.8
83	ソーニャ・ドローネー (1885-1979)	色彩のリズム	1953	油彩,カンヴァス	100.0×220.0
84	ルチオ・フォンタナ (1899-1968)	空間概念-銀のヴェネツィア	1961	油彩,ガラス,カンヴァス	60.0× 50.0
85	パブロ・ピカソ (1881-1973)	近衛騎兵(17,18世紀の近衛騎兵)	1968	油彩,パネル	81.0× 60.0 *
86	ジョルジョ・デ・キリコ (1888-1978)	広場での二人の哲学者の遭遇	1972	油彩,カンヴァス	80.0× 60.0
87	サンドロ・キア (1946-)	少女	1981	油彩,パステル,紙,カンヴァス	194.0×150.0
88	メダルド・ロッソ (1858-1928)	門番の女性	1883	ワックス,石膏	37.0× 30.0×17.0
89	オットー・グートフロインド (1889-1927)	ヴィキ(立体主義的頭部)	1911-13	ブロンズ	33.1× 25.0×25.0
90	アルトゥーロ・マルティーニ (1889-1947)	牛	1943/89	ブロンズ	28.5× 34.0×13.0
91	ペリクレ・ファッツィーニ (1913-1987)	風(踊り子)	1956-60	ブロンズ	139.0× 80.0×90.0

和室 松本コレクション「晩秋」

No.	作家名(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
92	碌々斎 (1837-1910)	飛石画賛	明治時代	紙本墨画,墨書	100.5×27.0
93	作者不明	木彫獅子香合	江戸時代	木,漆	5.5× 8.4× 6.7
94	樂一入(樂家4代) (1640-1696)	茶入 銘 子猿	江戸時代	陶	7.0× 5.5× 5.5
95	樂吉左衛門 (1949-)	黒樂茶碗 銘 赤雲西	2000	陶	9.5×11.8×12.4
96	樂慶入(樂家11代) (1817-1902)	黒樂茶碗 ノンコウ七種 鶴うつし	江戸時代	陶	8.3×12.2×12.2